

F Mつき総合アンプのジュニア版

＜パーフェクト型として外観も仲々優雅にできている＞



パイオニア・FM-R301をみて

“チューナーつき”ということは、いまや Hi-Fi 総合アンプの具備する必須条件となってきました。本誌 10 月号で紹介されたデラックス・アンプ FM-P 300 を発表したパイオニアが、今回ジュニア版とも見られる新型を出しました。—FM-R301—といつても同社ではこの新型 FM-R301 を、これまでの AM-R81 のように、“標準型”として長い間、第一線製品とするつもりで設計・製作したようで、さらに来月には、またまたモデルチェンジというような“新型競争”にまきこまれないようにとの意図がみられる。

現代の一般的風潮とも見える新型、新型そして新型と、しばしばモデルチェンジをしたり、次々に新型を出したりすると、お客はいくらさいふの底をはいてもまに合わわないというわけ

です。

性能について

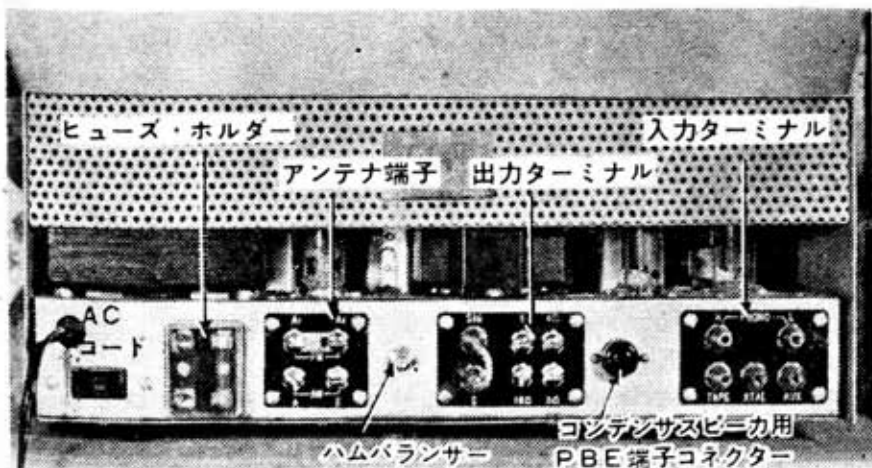
余談はさておき、本機の回路をみてみましょう。終段管は 6AR5 P.P. で低周波部分はこれまでの AM-R81 に比べてほとんど変化がありません。無歪出力 7.5W, 再生帯域 30~30,000c/s T.H.D が最大出力時 1,000 c/s で 0.5% のベーシックアンプ部分は、出力インピーダンスは 4, 8, 16 Ω , 利得は 14dB となつています。

出力 7.5 W は山水の PM-880 の 9 W に比して不利ではないか？ との間に、“この 7.5 W は絶対正直な値ですし、それにこの種家庭用再生装置アンプの出力は 7.5 W で十分ですよ、いままで AM-R81, 88 などであまりといわれたことは一度もありません。

その人たちは能率のよい当社のスピーカを使っているせいかな……”と自信満々でした。プリアンプ部分は 12AX7 を 2 本使つて CR タイプのイコライザー RIAA カーブ、CR タイプのトーン・コントロールを備えています。

このステーションに 5 つの入力ターミナルがあり、それぞれつぎのような利得をもっている。LOW...51.0 dB, TAPE...51.0 dB, HIGH...40.5 dB, XTAL...30 dB, AUX...12 dB といったところ。(いずれも 1,000c/s でトーン・コントロール・フラット)。

特色といえば、このアンプは 20c/s で -6 dB のランブル・フィルターをもっていることです。総合アンプではじめての試みで、モーターのワウやフラッターにはてきめんな効果があります。ノイズの点では SN 比 -60 dB と、これまでの -50 dB に比して、たいへんな努力のあとがみえ、メインアンプとプリアンプを分離して使えるようになってきているのは、この社の最近のアンプの専売特許の感がありますが、チャンネルアンプ用のフィルターでも市販したらどんなものだろう。特長にはちがいないが、まあ実際に有効に使



阿 於 季 箕 都 児

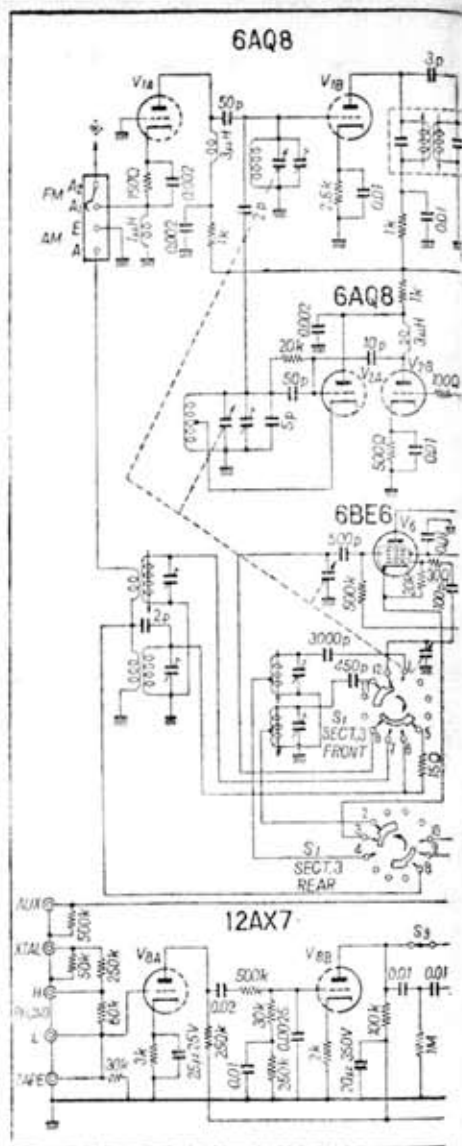
ついている人はいないのではないか。

チューナ部分は、FM・短波・中波がFM・SW・MWと記してある。このMWはMedium Waveの略なんだろうが、どうも日本だけの略語のような気がします。FMのみ非同調高周波増幅つきになつていて、短波・中波には、このアンプが対象としている層では、たしかに要らないかもしれませんが。われわれは短波といつても、せいぜいNSBのナイター中継ぐらいしかきかないから、それ以上を望む人はFM-P300の方を選ぶなり、通信型受信機で…ということになるでしょう。なおFMの場合電源アンテナを自蔵しており、外部アンテナを使うときはターミナル部のかんたんな操作で電源アンテナが外れるようになっている。この社では二年ほど前から高周波に力を入れ、人材や設備をそろえ、いまはコイルなども自製とかきいている。この社がやつていたテレビキットは、FM時代へのトレーニングだったという話も耳にしており、その結果がFM受信帯域を多くのメーカー製チューナが80~90Mcであるのに対して80~108Mcを実現し、これで1~3チャンネルのテレビ局音声を受信できるが、輸出にも大いに役立つということと考えられます。

いまでは、多少の差はあつても有名メーカーのアンプは回路的にはあまり変わらなくなりました。そうすると外観と安定度つまり故障率はその形式の寿命を左右するようになります。そんな面での抱負をきいてみると…「うちでは安い物をつくつても安物はつくらない…という方針です。ターミナルひとつみても、ピスは1本“嵌り”もするひきものです。マーク板の厚さ、文字の彫刻(パンチングでないという意)つまらないようですが、こんなところにも費用を惜しんでいません。だいたいこのアンプのチューンラ・コンデンサは全部オイルコンですよ。パワー管や整流管のソケットも、ほかの社のものと比べてください」との弁でした。

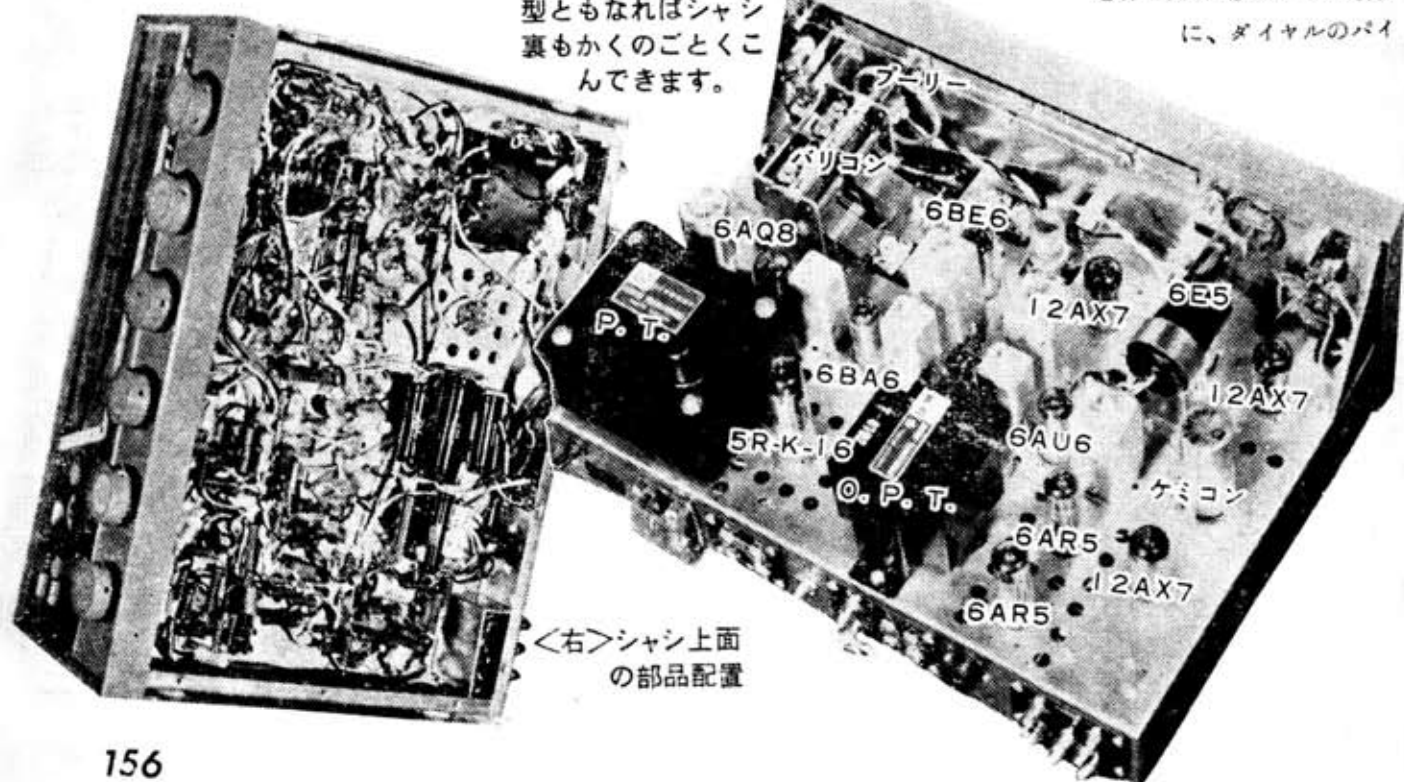
外観について

外観はこの社でははじめて全体に吸色を使つており、色はやや濃すぎるくらいで、よくみると正面だけでも相当の(10数色)色数を使っている。アクリルの大きなダイヤルの左にACとランプ・フィルターのスイッチがあり、ACメインスイッチのボリューム・コントロールからの分離に成功している。入力を一番左のノブで、PHONO、RADIO、AUXと切替えるようになって



ているのも珍らしいが、一目瞭然ということをおぼつたのでしようが、FM、SW・MWのバンドの切替に、ダイヤルのパイ

<左>さすがに総合型ともなればシャシ裏もかくのごとくこんできます。



<右>シャシ上面の部品配置

